

人生に絶望した男が自殺を図り立ち直るまでの物語

カウントダウン ―ある男の物語―

作・浜田

登場人物

男（29） 人生に絶望して自殺を考えている。

ホームレス風の男性（70） 石を集めている。浜辺で倒れていた男を助ける。

○男の部屋 朝

男がベッドの上に腰掛け虚ろな目で空を見ている。
少し開いたカーテンから光が差し込んでいる。

男の独白「2004年2月、私は勤め先をクビになった。次の仕事も見つからないまま貯金は底を尽き生きる気力も無くしていた。自分は社会の役立たずである事を完全に自覚していた。」

○男の部屋 夜

人生に絶望してボートと一日を過ごしていた男は夜になってノートに何か書いている。
最後のページに

「海の底でひとつの小さな泡が生まれた。

輝く水面だけを見つめて上へ上へと昇っていく。

水面にたどり着くと泡は弾けて消えた。」と書いた。

ノートの各ページにカウントダウンの番号を振っていく。

ノートの題名は「エンドノート」。

その後、ホームページで自殺場所の検索をする。

ホームページで探したいいくつかの場所に行って写真を撮る事にする。

○電車の往来の激しい踏切 昼

男は1枚の写真を撮る。「パシヤツ」

○高層団地の最上階 昼

ここは自殺防止の柵に行く手を阻まれる。

○男の部屋 夜

男は家に戻って来るとノートに写真を貼り説明を書き加える。

○首吊りのあったロープのかかったままの木 昼

男は1枚の写真を撮る。「パシヤツ」

○男の部屋 夜

最後の「の番号の振られたページを書き終えると男はノートをカメラバッグに収め部屋を出る。

○浜辺 早朝

男はアルコールと睡眠薬を飲み干すと立ち上がって振り返る事もせずゆっくりと海に向かつて歩き出す。

(ブクブクブク防水カメラを海に沈めるイメージ映像)

○浜辺 昼

海に入り自殺を決行するが浜辺に打ち上げられる。

そこにホームレスらしき男性が歩いてくる。

浜辺に倒れている男を見つけたホームレスは助け起こす。

男「ああ・・死ねなかったのか・・・」とつぶやく

並んで浜辺に座り二人で海を見つめる。

ホームレス「何か嫌な事でもあったのかい？」

男「ああ」

ホームレス「生きるってなあ石ころ拾いとおんなじよ」

ホームレス「価値があるかどうか分からんみんな必死に拾い集めてるだけさ」

ホームレス「(緑と紫色の石を袋から取り出しながら)・・・一緒に石探しするかい？」

しばらく沈黙…

ホームレス「石でも何でもいいのさ、お前さんが値打ちがあると思つた事を毎日続け

てりやそのうち死にたいなんて考えなくなるだろうよ」

ホームレスは去っていく。

○男の部屋 昼

机にカメラバッグを置く。

ゴミ箱にエンドノートを捨てる。

(家に戻った男は美しい写真を撮るといふ新しい目標を得て生きていく決意をする。)

○とある公園 昼

正面を向いた男の顔。男がカメラを構える。

「パシャッ」シャッター音がしてフラッシュが焚かれる。

その瞬間に暗転

(最後に撮られた写真はスクリーンの向こうに居る映画を観ている観客の表情かも・・・)

○暗転したまま

ナレーション「海の底でひとつの小さな泡が生まれた。輝く水面だけを見つめて上へ上へと昇っていく。」

終わり